

# いいやま半世紀の思い出は？

## 50年を想う

### —いいやまへの応援歌—

飯山市誕生から50年。この50年間には、さまざまな出来事や思い出が詰まっています。自然の厳しさや奮闘した日々、ふるさとのあたたかさを実感した出来事…。これからの飯山市へ向けて寄せられた「50年」へのメッセージ。

小生昭和27年6月、故郷常盤村を離れ夜行列車で上京しました。昭和24年より27年迄、常盤村農業協同組合第二事務所(戸隠)に勤務しておりました。その頃は畳表の生産が盛んで、組合の2階は競売で賑わっており、またリンゴの生産も多く集荷所でもありました。現在アスパラの生産が多くされていますが、我々が子供の頃は「螢草」と呼んでおり食用にしませんでした。

小学生の頃、夏は千曲川に泳ぎに行き、冬は長峰でスキーを楽しんだものです。昭和20年10月の水害は大変でした。また大雪で12月より3月迄飯山線が不通になり常盤村は完全に孤立しました事は忘れられない事です。

故郷を離れ52年になりましたが故郷を愛し、いつまでも自然豊かな飯山であってほしいと思います。

また東京の方々にも飯山の良い所を知っていただきたいと思い、ふるさと飯山会常盤地区の幹事としても、おおいに宣伝したいと思えます。10年後位には新幹線が開通の予定ですが、それまで長生きして新幹線に乗って飯山へ帰郷するのが夢です。

稲崎 集三 72歳  
(常盤上野出身 東京都在住)

昭和20年8月25日、1年間の予科練の軍隊生活を終えて、ふるさとに帰ってきました。そして翌年の1月に焼け野原の東京に出てきましたので、ふるさとの思い出は少年時代だけです。常盤村が飯山市になったことも東京で知りました。光陰矢の如し、半世紀を経た今でも、子供の頃が鮮明に脳裏に残っています。

私が生まれた昭和4年は大恐慌の始まり、小学校に入ってから日中戦争、太平洋戦争と大変な時代を過ごしました。「欲しがりません勝つまでは」のローガンのもとで我慢、耐えることを体験しました。そんな中での学校の勉強、家の手伝い、勤労奉仕、日の暮れるまで遊んだことが懐かしい思い出です。

戦後社会の波に揉まれながら、昭和を走ってこれたのも少年時代に経験した厳しさに耐えたことが貴重な財産になっていると思っています。

稲崎 宣成 74歳  
(常盤上野出身 東京都在住)

新幹線は菜の花大橋を渡って飯山駅にすべり込み、コトッとゆれて停車した。ドアが開くと冷たい飯山の空気が入ってきて東京の空気が混じり合った。

「おじいちゃん飯山だ。飯山だってば！」孫はおじいちゃんの肩に手をやってそう叫んだ。「む…碓氷峠かえ？」おじいちゃんは口をもぐもぐさせながらそうつぶやいた。「碓氷峠だなんてせ

ってらさ」父ちゃんはそう言って笑ったが、孫達にはその意味はわからなかった。東京から2時間といえは峠の釜めしにありつける時間だ。おじいちゃんは釜めしを何度も食べたんだと父ちゃんは孫に話をした。26個ものトンネルを歩くような速さで峠越えを味わった。おじいちゃんはそんな時代とスピードの関連をほぐすのに時間がかかるかも知れない。

川口 税 75歳  
(北町出身 千葉県在住)

久しぶりにJR飯山線に乗った。「乗って残そう飯山線」というキャッチフレーズが危ぶまれるような、まばらな乗客。50年前の飯山線発足当時はこの列車が住民の主要な足だったのに…。

車窓からは、きれいに田植えのすんだ田んぼやアスパラ畑が眺められ、農家も機械化や農薬・除草剤の普及で楽になったと実感する。日本人の長寿世界一もこうした経済発展を支えられてきたのだから。しかし、私は今、ふっと未来への不安を感じるのだ。今までの日本人は経済発展を追求することに熱心な余り、一番大切なことを忘れてきたのではないだろうか。それというのは、様々な公害の発生を許してきたことで、今や地球環境、地域環境の破壊・汚染が急速にすすみ、人類の生命さえもむしばみつつあるといわれる。

そうしたことから、私は今、自由参加形式の市の環境会議メンバーとして参加させてもらっている。代々引き継いできた小規模ながらの農地で、種々の農産物を作り出荷したりしているが、できる限り減農薬に努め、自身もできるだけ公害にさらされないように工夫し、100歳以上まで生きて、ピンピンコロリと逝きたいと願っています。また、これから新幹線の駅もできることだから、是非飯山のローカル線を残して、客足を呼びこみ地域発展に役

だてたいものである。

今清水 功 72歳  
(大倉崎)

飯山の自然の美しさと、人の温かさ魅せられて移り住んでから丸2年が経ちます。春になるとモリアオガエルが家裏のたねで卵をうみ、車庫ではツバメが子育てをする。初夏には、水路でホタルが舞い、縁側でお茶を飲

みながらカッコウやキジのさえずりが聞こえる。

私の夢は、ささやかではありますが、自分の子供が大きくなって飯山市制100周年を迎えたときにも、今と変わらぬ自然を感じる事ができる飯山市であってほしいということです。

井田 玲子 30歳  
(五束)

その頃の履歴を開いたら、「29.7.31地方自治法第7条により学校廃止 29.8.1長野県飯山市公立学校教員に任命する ○級○号俵を給する 飯山市立常盤小学校教諭に補する」とありました。当時、常盤小学校は長野県の実験学校で丸山利雄校長の下、土日返上も続きましたが春秋の農繁休業(田植え休みや稲刈り休みがあった)や夏休みには植物分類学の水島正美博士や横内斎先生などの植物調査に加わり、植物に親しんだことが私のライフワークになりました。

高橋 勸 74歳  
(五束)

昭和29年の頃は常盤の下水沢のお宮の下にあった長峰保育園で保育をしていました。大塚・下水沢・上水沢・大池の幼児が通園していました。弁当持参でおかずと味噌汁の給食でした。8月1日はどこかでお祝いの式に参列したことを覚えています。20歳の青春で人生の一番楽しかった時でした。

高橋 直江 70歳  
(五束)

今から50年前、周辺も町村の大合併により立派な「大飯山市」が誕生しました。その間、昔の飯山町役場が今日のあの立派な大庁舎に生まれ替り、市長さんも5人ほどの交替がありましたが、いずれの市長さんも新生飯山市のために大奮闘され、県下でも1、2を誇れる大市役所に発展しました。またその間、冬季国体も皇太子殿下をお迎えして開かれ、立派な成績を上げられた事を心より感謝し祝福申し上げます。

内堀 清 84歳  
(上町)

市制50周年、自分の年齢を感じます。この50年いろんなことがありました。母つづいて父の

死、その間に結婚、3人の子供の誕生。そして、3人の結婚(独立)、孫の誕生。2人目がもうじき生まれます。

大口 一雄 55歳  
(太田堀之内)

50年間の町並みは大分変わったと思いますが、家の裏の川では今も変わらず夏にはホタルが光ります。いつまでも変わらない自然を大事にしていきたいものです。

津久井 由里子 22歳  
(上倉)

春の花・夏の緑・黄金色の秋・真っ白な冬、この自然ゆたかな飯山に生まれ育ったことを幸せに想っています。そして「誇れるふるさと」として未来の子供たちに引継ぐことが出来ますようにと祈っています。

清水 のり子 56歳  
(静間大久保)

私達太田村は、飯山市二次合併であり、当時すでに太田岡山をのぞき、飯山市が生まれておりました。

私達青年団の代表で合併委員会に加わり、「旧市川村と岡山太田が合併3村で新しい村作りを」と村議を中心とした推進派と、飯山市へ二次合併をすべきという議論をかわした事を思い出します。旧市川村の理事者、議会との会談の言葉のやり取りなども、鮮明に浮かんできます。

飯山市への合併派は、当時は少数で、役場隣の店の2階で陣取り、夜を徹しての話し合いが続きました。その後、岡山村の状況の変化により、合併への方向になり、飯山市との二次合併へと進んで行きました。

当時合併について熱弁を振るわれた先輩方々が他界された今日、50周年を迎え、また平成の合併が大きく動いている時。そして何よりも新幹線飯山駅の建設を目の前にして、50年前の合併論議は風化されて行くのだろう。

50年の飯山市の歴史と、岳北地域の将来を思う時、不毛の合併論議ではなかったと、論は確実な歴史が生まれ育つものと思います。

上村 力  
(太田)

市制50周年を迎えるにあたって、今、思い出があります。私は中学生でした。瑞穂中学で、30人の3クラスもありました。あの日は朝からお祝いで、自分の部落の神社へ行列を作って歩いた記憶があります。道のあるきながら1学年下のしげちゃんが、本家の家で、男の子が生まれたんだ、記念の日になったね、おめでとう等と話したことを今でも覚えてます。

63歳 女性

※誌面の都合上、一部文章を修正しております。ご了承ください。